

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | テキスト受容を核とした批評概念の検討：イーザー、バルトを参照軸として  |
| Author(s)  | 林, 一晟   |
| Citation   | 論叢 国語教育学, 19 : 11 - 21  |
| Issue Date | 2023-07-31  |
| DOI        |   |
| Self DOI   | <a href="https://doi.org/10.15027/54970">10.15027/54970</a>                 |
| URL        | <a href="https://doi.org/10.15027/54970">https://doi.org/10.15027/54970</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



# テキスト受容を核とした批評概念の検討

—イザー、バルトを参照軸として—

林 一 晟

## 1 はじめに

文学テキストを対象とした「批評」概念に対する見解には、価値づけや価値判断とする見方(例えば、キャロル, 2017; ウェレック・ウォーレン, 1967)と、テキストの受容とその表出とする見方(例えば、イザー, 1982; バルト, 2005)とが存在する。中野(2014)によれば、とりわけ国語科教育において批評は「価値判断を内包する語」として理解されてきた経緯があり(p.55)、前者の見方に焦点が当てられてきた。だが、テキストに対する価値判断は本来テキストの受容を含む行為であり、テキストの受容を抜きにして価値を判断することは不可能である。したがって、いずれの立場においてもその根底にはテキストの受容が存在しているといつてよい。

国語科教育における批評概念については中野や石原(2022)が精緻な史的検討を行っているが、奥泉他(2022)も指摘するように、いまだ「批評の輪郭は明瞭でない」状況に鑑みると(p.296)、むしろ批評の根底にあるテキスト受容の側面から改めて批評概念を問い直すことが、批評の輪郭を明瞭にするための手掛かりとなるのではないだろうか。そこで、本研究では国語科教育における価値判断としての批評概念の課題を踏まえつつ(2)、テキスト受容としての批評概念を整理検討し(3)、そこで得た知見をもとに批評概念を定義したうえで(4. 1~4. 3)、再度価値判断としての批評について検討することを通して(4. 4)、文学テキストを批評する行為を捉えることとしたい。

## 2 国語科教育における価値判断としての批評の源泉

はじめに、国語科教育における批評を価値判断として位置づけた先駆けである石山(1935)、西尾(1965)の論を概観したい。

石山は批評をテキスト解釈の発展段階に位置づけており、〈通読—精読—味読〉という解釈の階梯の先に捉える。「通読」とはテキストの大意把握を指し、「全文をとにかく一二回乃至数回訓読」する「素読」、「未知難解の語句に就てその一般的意味を理解」する「註解」、それらの「結果としておのづから全文の主題と事象と情調とが極く大体の形に於て会得」される「文意の概観」が循環的に果たされることで達成される(p.182)。通読によるテキスト理解は「精読」の段階で精緻化され、テキストの主題(作家の意図)を表現との関連において確立する作業へと進む。精読は「全文の主題を探求し決定すること」「個々の事象を精査すると共にそれを主題に関連づけて統一すること」「個々の部分的情調及び全体としての統一的情調を味得し乃至はその情調のよって来る根拠を明らかにすること」の3つの作業を「各々の語句や文法・文体の固有の意味—その想の個性によって裏付けられた個性的意味—を捉えること」との循環的関連において達成することを目的とする(p.192)。これら通読・精読の段階で「己れを空しうして虚心坦懐に文意を受容れる」ことで「作者と読者とが合体」した状態において(pp.203-204)、「文の理解を一層進めて、自明的な、平易な、心安い読みにまで到」り、「読者が作者に代って文の想を発表する」段階が「味読」であり(p.203)、石山はこうした3段階のテキスト解釈過程による文意の理解と伝達を批評の前提としている。

石山は批評を「作者の想のあり方が果たしてあるべき姿にあるか否か、またその表現があるべき形式に於てなされているか否かを評価する所の「価値判断」である」(p.210)としたうえで、次の2つに分類する。

内在的批評：「その作品自体に内在する立場を標準としてその作品の構造の適否優劣を評価する」批評(p.209)。作家と同一の立場から作家の主題が最もよく達成されるテキストの構想や表現形式を想定し、実際のテキストの構想や表現形式を評価する行為。  
超越的批評：「その作品以外の立場を標準としてその作品の性格や優劣を評価する」批評(p.209)。作家と異なる立場から主題を設定し、テキストの構想や表現形式を評価する行為。

このように、石山の批評は作家の意図としての文意を体得したうえでテキストの構想や表現形式を評価する点にその特徴が認められる。

石山同様、西尾もまた批評をテキスト解釈の発展段階に位置づけ、〈素読—解釈〉を前提として成立する行為であるとしている。「素読」とは「一般的語義の理解をもつことを予想した読みの行的反復」を通して「解釈および批評の基礎たるべき全体的直観を確立せしめる」作業を指す(p.62)。ここでいう「全体的直観」は「文学作品に具現された作者生命の体感」を意味しており、西尾は読者が素読の段階で作家の感動や創作動機等の「作者生命」という主題を仮定することを想定している。「解釈」とはこのような素読によって仮定された主題をテキストの叙述の吟味や構想の発見によって確定させる作業であり、表現をもとに作家の制作過程を遡及することで主題を自己のものへと主体化する段階である。その意味において、「解釈の作用は、直観の反省的展開たることによって成立する客観的判断作用であると共に、また一つの自覚作用である」(p.70)といえる。

西尾は批評の前提に〈素読—解釈〉を据えたうえで、批評を「読みから来る直観の発展としての解釈を完成し、対象を自我の表現として見ることの出来るまでに至った立場において成立する価値判断である」とする(p.79)。西尾は作品から得た感銘の根拠をテキストに求めることで、批評は「その作品によって奏でられた読者の主観的感動の披瀝であると共に、また作品そのものを作者生命の深处において体得すること」へと発展すると述べており(p.80)、西尾の批評は〈素読—解釈〉の過程で「作者生命」と同一化した読者の直観に基づいたテキストに対する主観的価値判断であるといえる。

上記に概観したように、石山と西尾の批評はテキスト解釈による作家との同化を前提として実行される価値判断であり、そこではテキストの意味の受容が批評の前段階に据えられる。だが、テキストの意味の受容を価値判断の前提とする石山と西尾の批評の段階性については議論の余地がある。

まず、価値判断としての批評は必ずしも意味の受容に束縛されない。批評を価値づけとするキャロル(2017)はテキスト解釈について次のように述べる。

じっさいのところ現代では、芸術作品を説明するために最もよくなされている作業は一作品の意味や意義を考察する—解釈かもしれない。わたしたちは、あまりにおしゃべりな(garrulous)時代に生きているのだ。だが芸術作品については、作品の意味に関わらない説明がなされることもありうるのだから、解釈が分析の全体を占めることはけっしてない。解釈は、ただ分析の中の最も目立つ作業のひとつだ、というだけである。(pp.176-177, 以下、傍線稿者)

キャロルは必ずしもすべての芸術作品がテーマやテーゼを伝えることを目的としているわけではなく「ある種の情動的状態を喚起する」(p.179)ことを目的とする場合もあり、そうしたケースでは批評家の責務は「その作品がいかなる状態を引き起こそうとしているのかを突き止め、その狙いの効果が芸術家によっていかにして達成されているのかを説明すること」(p.180)にあるという。つまり、批評は叙述による情動喚起を分析の対象とする場合もあるため、テキストの意味のみを対象としない。イーザー(1982)は表現の意味と機能への焦点化は「両者はともに規定行為であって、文学テキストにおいてはなにが先決事項であるかを規定」する行為であり(p.44)、規定行為としての共通性を備えるという。このように、読者による先決事項の規定の違いによって批評の対象は異なるといえる。

加えて、価値判断はテキスト分析の段階時点で生じ得る。ウェレック・ウォーレン(1967)は批評における価値判断について次のように述べる。

意味の解釈と価値の判断とはたしかに分離しうるのではあるが、これは、「文学批評」においてはほとんど実行されないものか、あるいは、ほとんど実行できないものである。「公平無私な批評」に素朴にもとめられているもの、あるいは「公平無私な批評」としてあたえられているもの、は作家や詩の無遠慮な順位決定である、これは権威者からの引用やあるいは文学理論のもついくつかの独断へ訴えてゆくことを伴うのであるが、それ以上にすることは必然的に分析と分析的な比較とをふくめることになる。他方では、純粹に解釈的とおもえる論文が、その論文が存在することによって、何か最低の価値判断をあたえるにちがいないのである、そしてそれが一篇の詩の解釈であるならば、歴史的、伝記的、あるいは哲学的価値ではなくて美的価値の判断となるのである。ある一人の詩人や一篇の詩に時間をそそぎ注意をばらうことがすでに価値の判断なのである。(p.276)

批評の対象としてテキストを選択し分析する行為そのものが価値判断を内包する行為であり、したがって価値判断はテキストの受容を前提とするというよりは、むしろテキスト受容の過程において実行されることが、ウェレック・ウォーレンの言説からは理解できる。

以上のように、批評が価値判断とされる場合においても解釈によるテキスト受容と価値判断との間には必ずしも明確な境界線が存在するとはいえない。一方で、価値判断としての批評はその意味や機能に限らずテキストの受容を条件としていることが指摘できる。このようにみていくと、批評概念の検討にあたってはテキスト受容の側面に注目する必要が生じてくる。

### 3 テキスト受容としての批評概念

ここで、テキスト受容の側面から批評を照射したイーザーとバルトの論をみたい。イーザー(1982)はテキスト受容を「作品構造とその受容者との相互作用」に(p.33)、バルト(2005)は「二つの歴史と二つの主観性の、すなわち作者のそれと批評家のその対話」にそれぞれ見出しており(p.384)、両氏はテキスト(および作家)と読者の相互作用のうちに批評を定位する点に共通性が認められる。

まず、イーザーの批評はテキストの読書過程を基調とする点に特徴がみられる。イーザーは「語り手、登場人物、筋、虚構の読者」という4つの「遠近法」を統合することで読書は成立するといふ(p.60)。こうした読書過程においては「一定の視点をとる場合にのみ、テキストのさまざまな遠近

法を統合して、一つの意味に焦点を合わすことができる」ため、読者は一貫した読みを求めて適切な視点を模索することになるが、そうした視点は「テキストが先に挙げた遠近法を組み合わせた叙述をしているところから生じてくる」(p.60)。すなわち、テキストの受容はテキストが内包する遠近法に規定された一定の視点による統合によって遂行されるというのである。イーザーはこうした一定の視点による統合について次のように説明する。

テキストは、読者の移動する視点に対して、特異な超越性を示す。すなわち、読者は視点を、とらえようとするものの中におかざるをえないが、同時に目の届かぬところが出てくる。読者はたえずテキストの中で視点をずらして行くわけで、その限りでは読者はテキストを局面でしかとらえることができない。局面にはテキストの対象性(美的対象)があることはあるが、どれもその総体を示すわけではない。つまり、テキストの対象性は、読書の時間の流れの中に現われてくるもののどれとも同一ではなく、総体をとらえるには総合を行なうほかはない。ひいては、これが読者の意識へのテキストの転移ということになる。(pp.188-189)

テキスト受容における遠近法の統合は遠近法による規定を受けるものの、読者が選択した特定の遠近法による統合を意味するわけではない。遠近法の統合はより俯瞰的な視点によって実行される「総合」であり、この点において「遠近法という概念は、特定な立場からの方向性をもった見方という意味を含み、志向対象把握の特殊な様態を指す」といえる(p.196)。

このようなテキスト受容の視点は読書過程における読者のテキストに対する期待とその修正とによって次第に定められていくのだが、イーザーはこのようなテキストの受容過程を次のように描く。

読者は不斉合をなくそうとしても、その出発点はまさに異論のもととなった可能性にあるため、問題化された形態はそのまま背景として留まり、新たに求められる統合は、先に生み出された問題も解決するものでなければならなくなる。こうした過程のすべては読者の想像力の中で展開するので、読者はそこから脱け出すわけにはいかない。つまり、われわれは自分で作り出したものの中にとらわれていることになる。とらわれの状態は、われわれがテキストの現在の中にいることを示す様態であり、またそれゆえにテキストはわれわれにとっての現在になっている。(p.229)

テキストの受容とは読者が想像力を駆使してテキストを統合的に理解する「とらわれの状態」であり、この点を踏まえてイーザーは「わけても文芸批評は、こうしたとらわれの状態を論理のレベルで再現しようとする試みと考えられる」という。つまり、イーザーの批評は一定の視点による遠近法の統合過程を論理的に再現する行為を指し、批評は統合が遂行される読書過程を内包した概念として提示される。ここまです踏まえると、イーザーの批評は図1のように図示できる。

イーザーにとってのテキスト受容とは、読書における一定の視点によるテキストの遠近法の統合を意味し、批評はそうしたテキスト受容の様態を論理的に再現する行為として示されている。

バルトもまた一定の視点によるテキスト受容の側面を批評に見出しており、バルト(2005)は批評を「時代が批評に提供する言語(実存主義、マルクス主義、精神分析)を、作者が彼自身の時代に

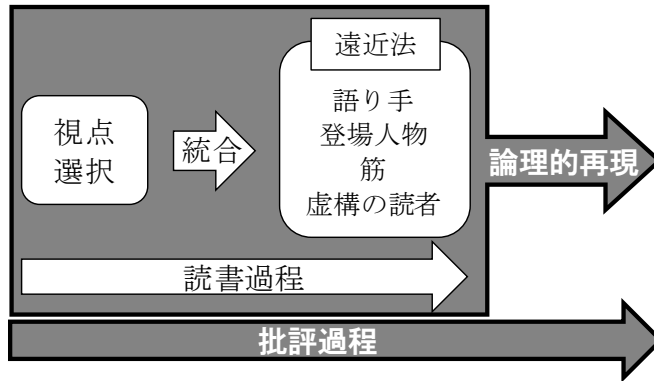


図1 ユーザーの批評プロセス

したがって練りあげた言語、すなわち一連の論理的拘束の形式上のシステムに当てはめる」行為として捉え、そこでは「作品の覆いを取り去る能力ではなく、それとは逆に、自分自身の言語活動によってできるかぎり完全にそれに覆いをかぶせる能力」が問われることになるという(p.382)。バルト(2006)はこのような批評は3つの制約を受けるとしており、自身の言語によるテキストの受容は①「すべてを変形させなければならない」こと、②「ある法則に従ってしか変形してはならない」こと、③「つねに同一方向に変形しなければならない」こと、これらの3つの制約によって規定されることとなる(p.96)。つまり、批評においては批評する者の言語によってテキスト全体が正当な関連性や規則性をもって同一方向に意味づけられる必要があるのである。このために、「批評家のほうはある種の「口調」を持たざるを得」ず、「この口調は、結局、断定的になるしかない」(p.116)。「批評家が最後の拠り所とするのは充実したエクリチュール、つまり断言的なエクリチュール以外にはあり得ない」ということになる(p.116)。バルトはここに読書と批評の境界を見出し、両者の相違を次のように説明する。

作品を愛し、作品に対して欲望の関係を保っているのはただ読書だけである。読書とは、作品を欲望することであり、作品でありたいと欲することであり、作品の言葉以外のいかなる言葉によっても作品を吹き替えるのを拒むことである。純粋な読者が生み出し得る註釈で、しかもつねに註釈であり続ける唯一のものは(ちょうど読書と模作を愛したブルーストの例が示しているような)模作である。読書から批評へ移行することは欲望の対象を変えることであって、もはや作品を欲することではなく、自分自身の言語を欲することである。しかしそれゆえにまた作品がそこから生れ出たエクリチュールの欲望へと作品を送り返すことでもある。(p.118)

バルトは読書と批評の間に一線を画しており、読書がテキストの模作であるのに対して「批評はエクリチュールであり(p.117)、欲望した自身の言語による一貫したテキストの意味づけを書くことで表出する行為であるとする。バルトの批評を図示すると、図2のようになる。

批評する者の言語という一定の視点によってテキストの一貫性を構築したうえで、そうした一貫

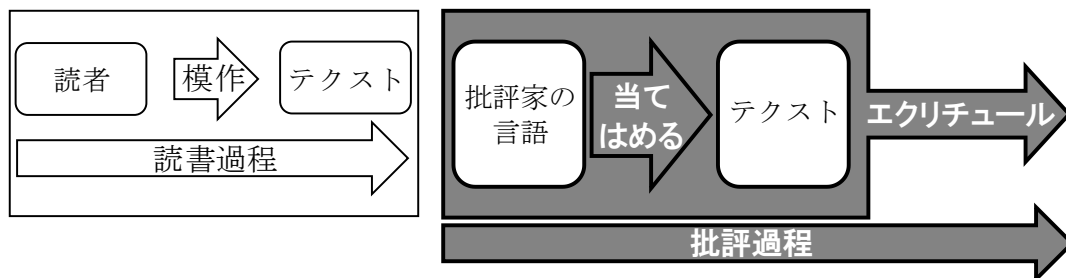


図2 バルトの批評プロセス

性を書くことによって表出する行為がバルトの批評であるといつてよい。

以上にみてきたイザールとバルトの批評は、テキストの受容を一定の視点に基づくものとして理解したうえで、そうした視点による一貫性構築作業を批評に認める点において共通する一方で、イザールの批評が読書過程を内包するのに対してバルトの批評は差異化する点に相違がある。したがって、ここからは両者の共通性と相違を指標として、批評概念を検討していく。

#### 4 テキスト受容批評を参照軸とした批評概念の検討

##### 4.1 読書過程との関係にみる批評プロセスの相違

イザールが読書過程の論理的再現を批評と捉えるのに対し、バルトは批評家の言語をテキストに適用させていく行為を批評とする。両氏の批評は一定の視点によって遂行されるテキスト受容とその表出として理解することが可能であり、いずれもテキストの一貫性構築を志向する点において、一定の視点はテキストに規定されるといえる。つまり、テキストの一貫性構築が達成できる範囲において、一定の視点は選択されることになる。

ただし、そうした視点はイザールの場合は読書過程において生成されるものであり、バルトの場合はいわゆる批評理論のようなテキストの外部から生み出されるものである。それに伴い、テキスト受容は前者がテキストから生成された視点をもとにテキストを解釈する行為となり、後者がテキスト外部の視点からテキストを解釈する行為となる。そのように捉えると、イザールのテキスト受容はテキスト内部における受容であるのに対し、バルトはテキスト外部からのテキスト受容を批評に設定していることが理解できる。このことから、テキスト受容としての批評にはテキスト内部から視点を設定してテキストを分析する「内的批評」と、テキストの外部から視点を設定してテキストを分析する「外的批評」とが存在することが指摘できる。廣野(2005)は文学テキスト批評の手法を、テキストが備える技法を分析する「小説技法篇」と批評理論によってテキストを分析する「批評理論篇」とに分別するが、内的批評は小説技法によるテキスト分析に当たり、外的批評は批評理論によるテキスト分析に該当するものとして把握できる。

先にみてきたように、内的批評と外的批評は視点生成の相違に起因する批評プロセスの違いによって分類されるため、批評を捉える点においてはそれぞれの視点がいかなるものとして設定されるのが論点となる。換言すれば、批評がとる視点によって批評の内実は変容するということがあり、批評概念を検討するうえで批評がとり得る視点を把握することが不可欠となる。

##### 4.2 批評がとり得る視点の様相

ウィトゲンシュタイン(2020)は「ウサギーアヒルの頭」(p.404 に図示される像)を例に、事物は見方(アスペクト)によって見え方が異なり、そうした見方においては「押し付けたり、押し込んだり、ということが起こっていたわけではな」く(p.417)、対象が示す枠によって見方は規定されることを指摘する。そうした見方は「体制のアスペクト」と呼び得るものであり、「そのアスペクトが変化すると、それまで一体になっていなかった像のいろんな部分が一体となる」という(p.432)。イーザーやバルトもまた、テキストによる規制を受けながら一定の視点によってテキスト全体を一貫性のあるものとして捉える行為を批評に含めているが、これは文学テキストが多様なアスペクトを備えているがために、テキスト受容においては一定の視点をとらざるを得ないということに由来している。

このように、一定の視点はテキストに規定されるのだが、果たして読者は具体的にどのような視点を形成することが可能なのだろうか。ここで留意すべきは、イーザーやバルトはテキスト受容をテキストとの相互作用に求めている点である。イーザーは批評における相互作用性について、次のように述べる。

われわれがテキストの現在の中にあるのは、このとらわれの状態によっているわけだが、この現在とは、意識におけるテキストの相関体であり、この相関体があって初めてテキストが出来事としての性格(生起性)を帯びてくる。ある出来事に直面するのは、その現在の中であって、なにかがわれわれに対して生起することを意味する。テキストがわれわれに対して現在性をもつにつれて、われわれそのものは、少なくとも読書の間、過去に入っていく。虚構テキストは、われわれが今もっている支配的なものの見方を過去におき換えることによって、それ自体が現在の経験になってくる。今生起していること、ないしは、今起きるかも知れぬことは、われわれの慣習的なものの見方がわれわれの現在を形成している限りは、およそありえないであろう。(p.230)

批評におけるテキスト受容とはテキストという「過去」と読者の慣習的なものの見方という「現在」との相互作用のうえに成立する行為であることが、イーザーの言説からは理解できる。バルト(2006)もまたこの点に関して次のように述べる。

批評家は自分の言語を作家の言語に付け加え、自分の象徴を作品の象徴に付け加えることで対象を「変形」して、そこに自己を表現しようとするのではない。かれは対象を自分自身の述部にするのでもない。かれは作品そのものの記号を、取りはずされて変化させられた記号としてもう一度再生するのであって、無限に繰り返される作品のメッセージはしかじかの「主観性」などではなくて、主体と言語との混淆そのものなのだ。だから批評と作品はつねに、私が文学であると言うのであって、そう言う二つの声の一つにして文学が表わしているのはただ主体の不在だけなのである。(pp.105-106)

批評とは批評する者の主観の押し付けではなく、テキストの言語との相互作用によって生じる解釈の可能性を提示する行為としてバルトは把握する。

このように、両氏の批評概念においてはテキストという過去と読者という現在の相互作用による解釈可能性の導出が基底をなしており、こうした理解はガダマー(2008)の「地平融合」の概念に拠



るものであるといつてよい。ガダマーは「地平融合」としてのテキスト解釈について、次のように説明する。

われわれは自分たちの先入見すべてをたえず試さなければならないので、実際には、現在の地平はつねに生成され続けている。そのように先入見を試すのは、特に、過去との出会いと、われわれがそこから由来した伝承の理解である。したがって、現在の地平は過去なしでは形成されない。獲得しなければならないような歴史的な地平が存在しないように、現在の地平もそれ自体で存在しない。むしろ、理解とはいつも、そのようにそれ自体で存在しているように思われる地平の融合の過程である。 (p.479)

テキスト解釈とは読者の先入見(現在の地平)とテキストの歴史性(歴史的な地平)との融合によって達成されることを、ガダマーは「地平融合」の概念として提唱する。このようなガダマーの理解とイーザーやバルトのテキスト受容が合致していることを踏まえると、批評における一定の視点はテキストが備える歴史的コンテクストと読者の主観性とを極とする領域において定められるといつてよいのではないか。現にイーザーは文学テキストが「社会規範の選択や文学上の引喩があるところから、それぞれの背景を構成する条件が与えられるし、また、読者はこの背景を手掛りとして、選択された要素の有意性をとらえることができる」とともに(p.167)、テキストによる読者の期待の修正過程は「テキストを自分の意識に翻訳し転移する過程」であると述べており(p.192)、テキスト受容はテキストの歴史的コンテクストに引き寄せられる場合もあれば<sup>1)</sup>、読者の意識化に傾く場合もあることが理解できる。さらにこのようなテキスト受容がテキストを中心として行われることを踏まえると、テキスト受容としての批評は次の3つの視点によって遂行されることとなる。

- ①「歴史観」的視点：文学テキストが制作された時代の政治的・社会的・文化的・経済的状況や周縁の文学テキストによる影響といった歴史文化的コンテクストとの関係においてテキストを批評する視点
- ②「作品観」的視点：テキストの外部にある歴史文化的コンテクストとの関連を持ち込まず、テキストそのものの批評に焦点化する視点
- ③「読者観」的視点：テキストが指示する意味以上に、テキストが読者の感情にどのような働きかけをするかという点に重点を置く視点

これら3つの視点はバルトの批評においても同様に指摘でき、バルトの視点がおよそ批評理論を意味していることに鑑みると、「歴史観」的視点には例えば新歴史主義やマルクス主義批評が、「作品観」的視点にはニュー・クリティシズムや脱構築批評等のポスト構造主義批評が、「読者観」的視点には印象主義や読者反応批評がそれぞれバルトの批評の視点に対応しているといえる。

#### 4.3 本研究における批評概念の提示

以上の議論から、テキスト受容としての批評とは、一定の視点に基づくテキストの一貫性構築およびその論理的表出であると約言できる。このような批評には内的批評と外的批評が存在し、それぞれ図3・図4のように図示できる。

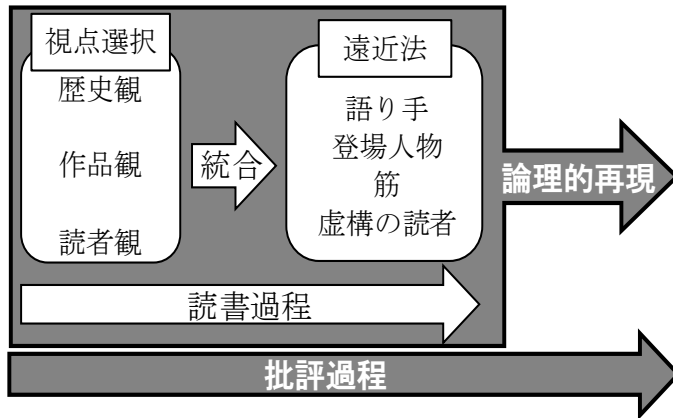


図3 内的批評のプロセス

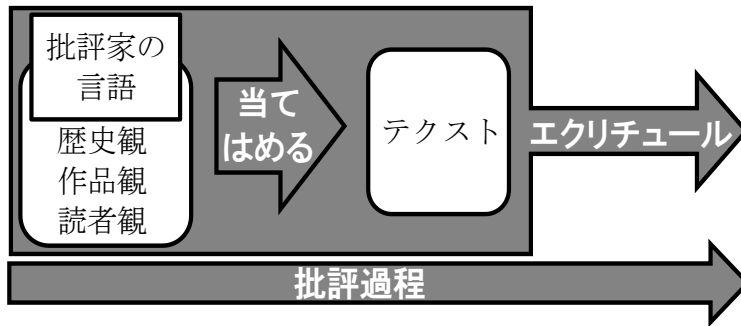


図4 外的批評のプロセス

#### 4.4 批評における価値判断の位相

先に引用したウェレック・ウォーレンの言説から判明した、批評としての価値判断がテキスト受容の過程に内包される点を考慮すると、価値判断の内実もまたテキスト受容の視点によって異なることが指摘できる。すなわち、「歴史観」的視点による批評においては歴史文化的コンテキストから判断できるテキストの価値を、「作品観」的視点においてはテキストの内部構造が備えるテキストの価値を、「読者観」的視点においては読者の生活経験に照らし合わせたテキストの価値をそれぞれ判断することが、批評における価値判断ということになるといえる。ただし、これらの価値判断がテキスト受容を基盤とすることに鑑みると、価値判断はすべてテキストの価値に焦点化される行為であって、テキスト以外の対象の価値を志向するものではないといえる。テキストの価値判断とは、テキストの一貫性構築過程において生じ得るテキストに向けた価値判断なのである。

ただし、ウィトゲンシュタインがアスペクトについて「これこれができる人、これこれを学び、マスターしている人についてのみ、これを体験している、とすることに意味がある」と付言するように(pp.433-434)、一定の視点によるテキストの一貫性構築にはテキスト分析の習熟度が関係してくる。この点に関して、文学研究の熟達者と初学者の違いがテキストの抽象的な解釈・論証や文学領

域における情報統合・論証能力(Zeitz, 1994)、文学や一般社会に関する幅広い教養に裏打ちされた推論の包括性(Graves, 1996)にあることを踏まえれば、教室空間での学習者によるテキストの一貫性構築や価値判断、およびそれらの表出は幅広い教養に裏打ちされた包括的なテキスト解釈・論証能力を高めていく学習との関連において論じられる必要があり、学習者にとっての批評は文学テキストの学習の総体において捉えられるべき行為であるといえる。

## 5 おわりに

本研究では、文学テキストを対象とした「批評」概念をテキスト受容の側面から捉え直すことで批評概念を再検討するとともに、価値判断の内実について改めて論じた。テキスト受容の側面を強調したイザーとパルトの批評概念の検討を通して、批評が一定の視点によるテキストの一貫性構築作業とその論理的表出を意味する概念であり、そうした批評は「歴史観」的視点、「作品観」的視点、「読者観」的視点の3つの視点によって実行されること、および批評にはテキストの内部から視点を形成する「内的批評」とテキストの外部に視点を設定する「外的批評」の2種類が存在することが判明した。さらに、批評における価値判断はテキストの一貫性構築過程において現れるものであり、その内実は批評する者が選択した視点によって変容すること、つまり「歴史観」「作品観」「読者観」のどれを選択したかによって、歴史文化的コンテキスト・テキストの内部構造・批評する者の生活経験のどれに準拠した価値判断が行われるかが決定されるということが明らかになった。このように、テキスト受容を核とした批評概念を定義し、批評の価値判断という性質を定直し直すことで、批評の輪郭を浮かび上がらせた点に本研究の成果が認められる。

ただし、批評が高度なテキスト分析能力や論証能力、分析のための幅広い教養等を要する点に鑑みると、とりわけ学習者にとっての批評はそのような能力や教養を育む文学テキストの学習全体との関連において捉えられる必要があるといえる。では、学習者の批評する力を高めるために、教師はどのような学習を設計することが可能なのだろうか。教室空間に批評を成立させるための学習の検討が急がれる。

## 注

1 この点についてはハーバーマス(1985)による「ある象徴的発言を理解することは、コンテキストを無視してその妥当性の要求に賛成することではない」という指摘からも支持できる(p.198)。

## 引用文献

石原雅子(2022)「国語教育における「批評」に関する研究の成果と課題」『人文科教育研究』第49号, 人文科教育学会, pp.29-48

石山脩平(1935)『教育的解釈学』賢文館

奥泉香・土井一生・田中大裕・金田富起子(2022)「アニメーション批評の専門家と国語科との連携で批評文を学習する試み—ひろしまアニメーションシーズンにおける中学生に焦点を当てたアニメーション教材の活用可能性—」『全国大学国語教育学会発表要旨集』143, pp.295-298

中野登志美(2014)「批評する力を育成する小説学習指導論の研究」広島大学大学院教育学研究科, 博士論文

西尾実(1965)「国語国文の教育」『西尾実国語教育全集』第1巻、教育出版、pp.15-191

- 廣野由美子(2005)『批評理論入門』中央公論新社
- ヴォルフガング・イーザー著、響田収訳(1982)『行為としての読書』岩波書店
- ノエル・キャロル著、森功次訳(2017)『批評について』勁草書房
- ハンス・ゲオルグ・ガダマー著、響田収、卷田悦郎訳(2008)『真理と方法Ⅱ』法政大学出版局
- ルートウィッヒ・ウィトゲンシュタイン著、鬼界彰夫訳(2020)『哲学探究』講談社
- ルネ・ウェレック、オースティン・ウォーレン著、太田三郎訳(1967)『文学の理論』筑摩書房
- ロラン・バルト著、吉村和明訳(2005)『ロラン・バルト著作集 5』みすず書房
- ロラン・バルト著、保莉瑞穂訳(2006)『批評と真実』みすず書房
- ユルゲン・ハーバーマス著、河上倫逸、M.フーブリヒト、平井俊彦訳(1985)『コミュニケーション的行為の理論(上)』未来社
- Graves, B. (1996). The study of literary expertise as a research strategy. *Poetics*, 23, 385–403.
- Zeitz, C. M. (1994). Expert-Novice Differences in Memory, Abstraction, and Reasoning in the Domain of Literature. *Cognition and Instruction*, 12, 277–312.

(広島大学大学院博士課程後期2年)